

～中山間地域発、現場からのデジタル変革を目指して～

自治体のデジタル化を巡る動向・背景

- 地方を取り巻く状況（人口減少・高齢化・職員の減少、コロナ禍・後、物価高騰・円安等）
- この20年の「デジタル」をめぐる劇的環境変化
- これからの課題・リスクとデジタル技術
 - ・地域経済・住民サービスの制約、厳しい行財政運営
 - ・大規模災害リスク・危機管理対応



地域における「デジタル」の活用

- 👍人口の減少や高齢化の一層の進行、地域の「厳しい」「小さい」「遠い」「不便」といったハンディキャップ（マイナス）としてあきらめていたことを、プラスの個性や強みに変える。
- 🌍地域資源を最大限に活かし、「ひと」とのつながりと「デジタル」を上手に組み合わせることで、真の豊かさや幸せをみんなで分かち合える「多様な価値を創造する」地域経営のトップランナーへ

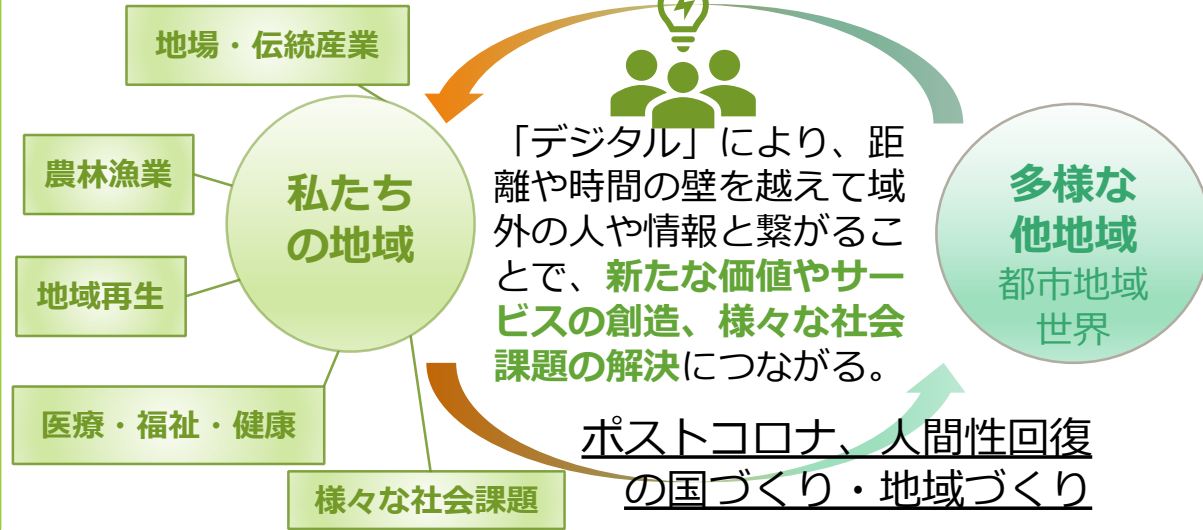
私たちにとって「DX」とは何か

- デジタルを巡るいろいろの定義の仕方があるが、次の要素を押さえておく必要がある。
 - ・「デジタル」とは、デジタル技術、デジタルデータ、システムである・
 - ・「デジタル化」とは、これまでアナログ（紙などのアナログデータや手作業）で行っていた業務を、デジタルを用いたものに転換することである
 - ・「DX（デジタルトランスフォーメーション）」とは、既存の業務にとどまらず、**組織、プロセス、組織文化・風土をデジタル化によって変革**することである。
- 中山間地域等の小さな自治体において、デジタル技術等の活用によって住民の利便性を向上させるとともに、業務効率化を図り、人的資源を行政サービスの向上につなげる「自治体DX」をめざすためには、**自治体職員の「意識改革」と「行動」**がカギを握る。**住民を巻き込む**こともポイント。
 - このことは、**中山間地域発で都市地域に先駆け地域課題解決や地域の新たな可能性を大きく切り拓く**チャンスでもある。
- 条件不利地域をはじめとする地方を取り巻く状況が今後益々難しくなる一方で、官民のあらゆる活動が「デジタル」前提に向かう中で、地域の現場の創意工夫で行政と住民が協働で**身近な「デジタル」を「アナログ」と上手に組み合わせ**、安定的で**持続可能な自治体運営・地域経営の道**を切り拓いていくことは、後に続く世代に対する現役世代の使命・責務といえる。

デジタル技術を活用した地域社会の活性化と課題解決

《取組の視点》

- 「デジタル田園都市国家構想」をはじめとするデジタル関連施策の加速化と地域活性化
- 行政の対応と人材の確保・育成
- 地域づくり人材と「デジタル」の視点からの仕組みづくり
- 国民共有のデジタル基盤整備、情報通信インフラの整備推進
- 技術・システムの開発・普及・利用と地域情報の利活用
- 予算の確保、賢いデジタル活用、規制の緩和・改善



「デジタル」による地域社会の新たな可能性～地域を活かし人を活かす～

- 「デジタル」はあくまで手段である。「デジタル」をどのように地域社会に活かすかの先にある、「デジタル」により地域を活かし人を活かすために、**地域社会を変えていく真の「変革」**が必要。
- デジタル化の推進で「何をめざすか」の真の目的を深く考えないまま、表面的な「利便性」や「効率化」により、集約・合理化や規模拡大を押し進め、**小さいものや弱いものが排除されたり、地域の持っかけがえのない価値が劣化・消滅してはならないこと**である。むしろ、**その真逆をめざすこと**。
- 人口減少社会においてこそ、**一人ひとりの存在を地域社会で輝かせる**ことが求められる。
- 中山間地域等の小規模自治体には、この点からもその可能性と貢献を期待したい。
- 住民との距離が近く、いまある地域コミュニティの強みと弱みを熟知している**中山間地域等が「人材」をはじめ地域資源を活かし、都市地域や海外ともネットワークでつながり、関係人口を増やすこと**で、地域社会を再生し、あるいは地域社会を変革していくことを期待したい。
- そして、「リアル」と「デジタル」の融合した新たな地平を切り開く、その起点としての中山間等の小規模自治体（町村）期待したい。